巻頭言 ―70巻発行にあたって―

歴史を知る

一般社団法人国立医療学会理事長

桐　野　高　明

IRYO　Vol. 70　No. 1（3－4）2016

明けましておめでとうございます．今年をもって，本誌が創刊されて70周年を迎えることになり，大島久二編集委員長が，本誌の創刊号を引用して，その歴史を記しておられます．この「国立病院学会誌『医療』の歴史」を読んで，創刊に塩田広重氏が重要な役割を果たしていたことを知りました．塩田氏のこの功績により，本誌の塩田賞が創設されたのだと言うことも，明確に意識してはいなかったのです．

塩田氏（むしろ塩田先生と呼ぶべきかも知れません）は戦前から戦後にかけての日本の医療のリーダーの一人です．東京帝国大学の外科教授として，東京駅で狙撃された濱口雄幸首相の手術をおこない救命したこと，二・二六事件で襲撃された鈴木貫太郎侍従長の弾丸の摘出をしたことなどは有名です．激動の中を生きぬいた外科医と言ってもよいでしょう．また戦後，家庭向けの医学書「家庭の医学」の創刊にあたり責任編集をおこなったのも塩田氏です．塩田氏は第二次世界大戦直後，陸海軍病院を国立病院とするにあたり厚生省医療局長としてその指揮を執りました．その時に，本誌が創刊され，発刊の辞を塩田氏が執筆しておられます．この中で，氏は医療者が「博愛仁慈の根本精神」に基づいて親切に診療を行うべきことは言うまでもないが，それとともに医療が科学によって堅く裏付けられていなければならないと熱意をこめて訴えておられます．発刊の辞には戦時下の雰囲気がまだ漂っていますが，医学が目指すべきことは時代を越えて共通だと強く感じました．

本誌の発刊の当時，国民の健康状態は悲惨を極め，国立病院の創設がなければ，さらに深刻さは増したことでしょう．国立病院以外の病院が少なかったこと，国立病院・療養所の結核に対する役割が極めて大きかったことにより，国立病院・療法所はその頃わが国の医療の約三割を占める非常に大きなものでした．国民生活が改善して結核による死亡も激減し，いくつかの結核療養所が縮小・閉鎖されることになりましたが，重症心身障害児の医療や神経難病の治療に役割の重心を移した病院も少なくありませんでした．昭和60年代以降には統合や再編が進み，一番多い時には300近くあった国立病院・療養所は154まで数を減じた状態で，平成16年に独立行政法人国立病院機構となったのです．

国立病院機構の歴史を把握しておくことは，現在の国立病院機構のあり方や将来の姿を考える上でとても有用です．現在の国立病院機構は過去の国立病院・療養所の延長線上にあります．その長所も欠点も受け継いでいます．

わが国の軍の病院は明治の初めに創建され，第二次世界大戦当時には，さらに各地に軍病院や傷痍軍人療養所が集中的に創設されました．戦争中には結核が猛威を振るい，そのため各地の結核療養所は日本医療団という組織に一本化され終戦を迎えました．それらの病院群を一まとめにして国立病院・療養所となったのです．このような歴史の影響は今でも根強く残っていることは驚くべきです．病院が一般の国民の一般の診療のために設立されたものでないため，かなりの病院は市街地からはむしろ不便な所に立地していること，病院の構造に戦前の病院建築の

特徴を未だに残していることなど，その影響は今でも各地に残っています．ただ，一方で美しい自然環境の中にあり，広々とした敷地面積に恵まれた病院も数多くあることは，国立病院機構のよい所だと言ってよいでしょう．

国立病院の将来を考えるときに，過去にも振り返って歴史を知り，歴史に学ぶことも，時には必要であることを思い出していただければ幸いに思います．

本年が皆さんに取って良い年となりますことを祈ります．